

## P1-018

## 1歳6か月児および3歳児における齲蝕罹患要因に関する研究—特に授乳法と口腔の健康管理に関わる因子について—

田代 紋子、米津 卓郎、熊澤 海道、櫻井 敦朗、新谷 誠康

東京歯科大学 小児歯科学講座

## 【目的】

我が国における低年齢児の齲蝕罹患要因に関する研究はしばらく行われておらず、最近の諸外国の研究をみても、対象とした小児の年齢に幅がある断面的調査が多く、我が国の小児の齲蝕予防対策を講じる上で参考とならないものが多い。そこで本研究は、1歳6か月時から3歳時まで経年的に追跡した小児を調査対象とし、齲蝕罹患要因について調査したものである。

## 【方法】

調査対象は2010年から2012年生まれであり、東京都下某市の保健センターで行われている1歳6か月児と3歳児歯科健康診査を受診した387名の小児である。それらの小児に対し、一人の小児歯科専門医が歯科用チェアー上で无影灯の下、齲蝕の有無を診断した。そして、各健康診査時のアンケート調査票と口腔内診査結果を用いて、先ず1歳6か月時の齲蝕の有無別に齲蝕罹患要因を比較検討した。次いで1歳6か月時に齲蝕に罹患していた小児を除外し、1歳6か月時における調査項目と3歳時の齲蝕の有無との関連性を比較検討した。各年齢における齲蝕発生に関する要因の解析は、先ず $\chi^2$ 検定を行い、次いで各年齢における齲蝕の有無を従属変数とし、口腔内の診査結果や各健診時のアンケート調査結果を説明変数として変数増減法による多重ロジスティック回帰分析を行い、オッズ比の比較から各年齢における齲蝕罹患と関連する要因について検討した。

## 【結果】

ロジスティック回帰分析の結果、1歳6か月時の齲蝕の有無との関連性が認められた調査項目をオッズ比の値が大きかった順にみると、歯磨きの回数、1歳6か月時における母乳継続、間食の回数、1歳6か月児歯科健診時の歯の汚れ、1歳時における口腔衛生指導の有無、萌出歯が16歯以上、カリオスタットの結果が $\geq 2$ であった。また3歳時の齲蝕の有無は、1歳時における口腔衛生指導の有無、1歳6か月時における歯磨きの回数、1歳6か月時の身長、1歳6か月児歯科健診時の歯の汚れであった。

## 【結論】

1歳6か月児と3歳児の齲蝕罹患要因として1歳時における口腔衛生指導の有無に有意の関連性が認められた。低年齢児の齲蝕を更に減少させるためには、1歳児に対する歯科健康診査の実施が不可欠であり、母乳の長期間継続とう蝕罹患の関連性を説明するとともに、歯磨きを早期から習慣づけるといった歯科保健行動を確立させることが必要だと考えられた。

## P1-019

## 歯科大学病院小児歯科における初診患者の実態調査 東京都心と千葉県下の大学病院の比較

富永 早紀、辻野 啓一郎、櫻井 敦朗、新谷 誠康

東京歯科大学 小児歯科学講座

## 【目的】

小児の齲蝕が減少しているといわれて久しい。しかし、歯科大学病院小児歯科の受診患者は逆に増加し、同時に患児の来院動機は多様化していることが報告されている。このことは高次医療機関である大学病院の役割が時代的な変化にあわせて変貌しつつあることを示唆している。また、大学病院にも地域性があり東京都心部と東京通勤圏の政令指定都市では、そのニーズや患者層にも違いがあるものと思われる。そこで、東京歯科大学水道橋病院小児歯科(以下、水道橋病院)と東京歯科大学千葉病院小児歯科(以下、千葉病院)の初診患児の実態調査を行い、比較検討を行ったので報告する。

## 【方法】

対象は水道橋病院では2013年から2015年、千葉病院では2012年から2016年に来院した初診小児患者である。初診時の問診票と診療録をもとに患児の性別、来院動機、国籍などについて調査を行った。

## 【結果】

初診患児数は水道橋病院では1994名(年平均665名)、千葉病院では5662名(年平均1132.4名)であった。男女比は水道橋病院が54:46、千葉病院が57:44と、いずれも男児が多く、初診時年齢は両病院とも3歳から8歳までが多かった。また、来院動機は両病院とも齲蝕治療が最も多かった。その他の来院動機は両病院で順位に多少の差があるものの、外傷、歯数異常、歯列異常が多かった。外国籍の受診患児は、水道橋病院で全初診患児の8.0%であったのに対し、千葉病院では2.8%であり、水道橋病院の方が多く認められた。外国籍患児の多くは齲蝕治療が来院動機であり、初診時年齢も6歳未満の割合が高い傾向が認められた。さらに水道橋病院で乳歯列期に齲蝕治療を行った小児についてみると、一人当たりの齲蝕歯数が乳歯20歯のうち11歯以上であった患児は、日本人患児では26.2%であったのに対し、外国籍患児では41.9%と重症齲蝕に罹患しているものの割合が高かった。

## 【考察】

過去の報告と比較し、初診患児数は両病院とも増加していた。小児の齲蝕は減少しているといわれているが、本調査では来院動機は依然として齲蝕治療が最も多かった。また、最近の変化として外国籍患児の増加があり、特に東京都心部の水道橋病院でその傾向が強く認められ、その多くは低年齢の重症齲蝕患児であった。今後、文化や食生活習慣の異なる多様な患児への対応が求められていると考えられた。